トークトーク

コア事業強化

栗山 章司氏
（丸紅建材リース社長）

50年の節目、原点回帰でさらに成長を
社内インフラ整備一段と注力

――丸紅建材リースに活躍の場を移され、最初に抱いた印象はいかがでしたか？

重仮設リースという社会基盤を支える非常に重要な役割を担っている会社であることに感銘を受けた。社員の皆さんは非常に誠実に仕事に取り組んでおり、それは赴任した早々に肌で感じられるほどだった。お客様と協力会社をとても大事にしていて、何より信用と信頼というものに重きを置いていて好印象だった。

――新社長に就任されて、かじ取りはどのように行っていかれますか？

社員の皆さんが誠実に頑張っている姿を見て、こうした想いに精一杯応えていかなければいけないと思った。社業が発展して、社会的にも貢献する、こうしたことのやりがいというものを社員全員で分かち合えるようにするのが理想だ。そのために必要なことはまず社員のベクトルを確認しながら揃えてやっていくことだと思う。

――足元の需要環境についての感触はいかがですか？

首都圏の再開発需要と、東京五輪関連需要とで建設分野は堅調な推移が続くと見ている。ただ、その一方で人手不足や建機・輸送機不足による着工遅れなどの問題が表面化していて、当社への発注遅れやコスト上昇など、その懸念を抱えている。

――そうした環境を踏まえた戦略については？

コア事業の更なる収益基盤強化を行うと共に、材工一式工事の推進、生産性向上のための工場設備投資を積極的に行うなど社内インフラ整備に一段と力を入れる。加えて財務面の強化、コンプライアンスの徹底、安全管理対策強化、人材確保と育成にも引き続き取り組んでいく。

――収益基盤強化のお話が出ましたが、具体的には？

これは地道に賃料の改善を進めると共に、先ほども触れたように材工一式受注強化とコスト競争力強化に目の前の課題を1つひとつ丁寧にやっていくことが、結果として収益向上につながると考えている。

――2018年度連結業績予想では売上高212億円、経常利益13億円としていますが、目標値は達成できそうですか？

中期経営計画の進捗も踏まえ、財務指標に関しては1つひとつの課題に丁寧に取り組んでいれば必ずクリアできると信じている。

――コスト競争力強化についてですが、そのための投資についてはいかがでしょう？

昨年度から設備投資を増やしてきているが、今年も安全対策中心に前年並の投資を考えている。現場の安全を重視した設備投資を行えばおのずと作業効率もあがる。結果、生産性が向上する。これは業績に確実に表れてくると思う。

――新規の戦略的投資についてはどのようにお考えですか？

国内においてはコア事業を支えていくものを育成していかなければならない。例えば当社の専門知識が応用できる周辺分野で広げていくことが望ましい。基礎工事や建築・土木工事・物流に関連するものを取り上げていく。海外においては既に実績を出しているタイマルケンを軸足にアジアの需要を捕捉していくことを模索している。東南アジアが主に対象エリアになってくるだろう。

――ご自身が丸紅時代に同エリアでのビジネス人脈を持っていらっしゃいますね。

丸紅というのはもともとアジアの電力プラントが強い。現地の日系、地場両方のゼネコンとのつながりがあった。当社としてはせっかく丸紅グループにいるのだから、こうしたネットワークを活用しない手はない。グループ力を活かせばもっとビジネスの領域が広がるはずだ。

――今年は創立50周年という大きな節目を迎えられます。これについてはどう受け止めていらっしゃいますか？

50年もの歴史を積み重ねることが出来たのは、それだけ社会から求められているということだと思う。当社はバブル期に企業規模を拡大したが、不況に突入すると共にリストラを迫られるという変遷を経ている。そうした厳しい時代を（7面に続く）

乗り切ることが出来たのはステークホルダーの皆さまのご支援があってこそ。感謝の気持ちで一杯だ。私も社員もこの感謝の気持ちをこれからも忘れてはならないと思う。これから更に歴史を重ね、企業として成長していくために会社として原点に立ち返ることが大切なのではないか。社員の気真面目さと誠実さ、これはしっかり守っていかなければならないと考えている。（康）

プロフィール　１９５６年４月生まれ。79年に一橋大商学部を卒業後、丸紅に入社。金属資源を中心にキャリアを重ね、代表取締役常務執行役員を務め、直前ではアセアン統括を担当していた。２０１８年４月に丸紅建材リースに赴任、６月に社長就任した。いつも大事にしているのは「正・新・和」。これは丸紅の社是でもある。「初代社長が社員の前で話した言葉だそう。いつも正しいことを、新しいことを、仲間の和を大切に取り組んでいく、これを地道に実現していくことが、業績にも自然とつながってくるものだと思う」。